

## 令和5年度 糸魚川市中学生広島派遣研修の概要

## 1 目的

唯一の核被爆国の国民として、被爆の恐ろしさ、苦しみを伝えるとともに、次代を担う子どもたちの未来のために、平和で豊かな暮らしを認識することを目的とする。

## 2 派遣先

広島市

## 3 派遣期間

令和5年8月5日（土）～7日（月） 2泊3日

## 4 参加生徒

No.	氏名	ふりがな	性別	学校名
1	阿部 凜平	あべ りんぺい	男	能生中学校
2	中嶋 一慳	なかしま いっせい	男	
3	朝比奈 小春	あさひな こはる	女	糸魚川東中学校
4	内田 光	うちだ ひかり	女	
5	伊藤 さゆり	いとう さゆり	女	糸魚川中学校
6	長谷川 紗花	はせがわ さやか	女	
7	北山 結菜	きたやま ゆな	女	
8	猪股 紗瑛	いのまた さえ	女	
9	小田嶋 陽菜	おだじま ひな	女	青海中学校
10	長谷川 未空	はせがわ みそら	男	

## 5 引率職員

No.	所属	職名	氏名
1	こども教育課	嘱託指導主事	小竹 厚
2	健康増進課	主 査	野本 彩希
3	総務課	主 事	恩田 朱莉

6 実施経過

5月末	参加生徒、担当教諭の選出
6月26日(月)	担当教諭打合せ会
7月24日(月)	事前学習会
7月25日(火) ～8月3日(木)	各中学校で作製した千羽鶴を市役所本庁舎 市民ホールに展示
8月5日(土) ～7日(月)	広島現地研修
8月17日(木)	研修報告会
2学期以降	各学校での研修報告会

7 広島現地研修スケジュール

－ 1日目－ 8月5日(土)

時刻	行程
8:10	出発式(糸魚川駅自由通路)
8:41	糸魚川駅 発
14:12	広島駅 着
15:40～16:50	平和記念公園見学(千羽鶴献納)
17:15～18:15	被爆体験講話聴講
20:00	旅館 着

－ 2日目－ 8月6日(日)

時刻	行程
7:00	旅館 発
7:50～8:50	平和記念式典参列
10:40～12:20	呉市 大和ミュージアム見学
15:00～16:50	旅館 着 とうろう流しメッセージ作成

19：00～20：30	とうろう流し参加
20：40	旅館 着

－ 3 日 目 － 8 月 7 日（月）

時 刻	行 程
8：30	旅館 発
8：40～10：10	平和記念資料館見学
10：30～11：00	本川小学校平和資料館見学
12：33	広島駅 発
19：01	糸魚川駅 着
19：10	帰還式（ジオパル）

## 広島派遣を振り返って

能生中学校 2年1組 阿部 凛平

僕が3日間で一番印象に残っているのは、原爆ドームを見たことです。理由は、世界遺産というものを実際に見る経験をしたことがなく、とても楽しみにしていたからです。原爆ドームの写真を見たことがあり、どのようなものか知っていたけど、実際に見た原爆ドームは、当時の悲しみや恐ろしさや、本当に戦争があったんだということを初めて感じる事が出来たのが、一番印象に残っている理由です。僕は出発式の挨拶で、被爆体験を語る人が年々減っているので、私たちが語り継いでいかなければならないと話しました。学校で仲間をしっかり伝えることが研修の機会を与えてもらった私の責任であると思って出発しました。

1日目は、山口さんの被爆体験講話がありました。そこで一番印象に残っている言葉は、「私たちは被害者ですが、被害者になった原因が必ずある」という言葉です。この言葉を聞いた時に僕は新しい視点を発見することができました。山口さんの講話のおかげでアメリカの立場に対する新しい考えを1日目で学ぶことができました。

2日目は、平和記念式典や、とうろう流しといったこの派遣研修でメインのイベントに参加をしました。平和記念式典では岸田総理の平和への願いや、小学6年生の2人の力強い発表がありました。小学6年生の2人の発表でとても心に残っている一言は、「皆さんにとって、平和とはなんですか？」です。この言葉に僕はとても考えさせられました。「確かに平和とはなんだろう」と、

---

考えました。僕が思う平和とは、戦争がなく、安心安全の暮らしができることが平和だと思います。

夜に行われたとうろう流しで、僕は、大きい文字で印象に残る言葉を書き、川に流しました。その一面に僕は、「核は滅亡」と書きました。なぜこの四文字にしたかという、今もまだ核兵器をもっている国がたくさんあります。核兵器がなければ人々は怯えることがなく、安心して暮らせるし、世界の平和にもつながると思ったからです。川にはとてもたくさんのとうろうが流れていて、とても綺麗でした。

3日目には、平和記念資料館と本川小学校平和資料館に行ってきました。平和記念資料館にあったのは、恐ろしいものばかりでした。当時の破壊された街の写真や、遺骨がとても並んでいた写真や、火傷を負った人々の写真がたくさんありました。僕はとても怖かったですが、学校の人のためにも頑張って見ていました。当時の軍服や、原子爆弾「リトル・ボーイ」の8分の1スケールのも物が置いてありました。本川小学校には、当時のまま残る鉄筋コンクリートの壁がとても印象的でした。

今回の研修で僕は、原爆の恐ろしさや、アメリカの新たな視点を改めて知ることができて良かったです。最初の挨拶でも言ったとおり、学校や身近な人に今回の研修のことを伝えられるように頑張っていきたいです。

---

## レポート

能生中学校 2年2組 中嶋 一惺

三日間の中学広島派遣研修で三つの言葉に出会い、考えさせられました。

一日目は、平和ボランティアガイドに山口さんの話をお聞きしました。山口さんは、胎内被爆者です。胎内被爆者とはお母さんのお腹の中で被曝した方のことを言います。普通に被曝するよりもお腹の中で被曝する方が、放射線の影響を受けやすいことを知りました。「日本は被害者でもあり加害者である」これも、山口さんのお話で知りました。日本は植民地の人に対して、悪いことをしました。僕は、植民地の人だけではなく日本人も傷つけたと思いました。

二日目は、広島平和記念式典に行ってきました。僕はその中でも、2人の小学生が力強く誓った「平和への誓い」が心に残っています。この「平和の誓い」では、普段過ごしている日常にもたくさんの平和があると分かりました。次に、大和ミュージアムに行きました。大和ミュージアムには、呉市の歴史や、戦争で活躍していた戦艦がありました。僕たちは、大和ミュージアムで学んだことは「歴史を未来に」という言葉です。大和ミュージアムがある呉市は戦艦大和などの軍艦製造を行っていました。ですが、戦後は呉市にあった人材や技術を活かして近代化に大きく貢献しました。僕はこれを素晴らしいと思いました。

三日目は、平和資料館に行ってきました。その中にはパンフレットで目を覆ってしまった写真や絵もありました。そのくらい原子爆弾は、落としてはいけないものだと改めて思いました。本川小学校には、原子爆弾で溶けたものを展示しています。それから、原子爆弾が落とされた後の温度を目で知ることができました。

---

この三日間で、平和について考えさせられました。二日目の大和ミュージアムのお話「歴史を未来に」という言葉がありました。このことから、自分の悪いところに気づいて、それを直すのは平和にするために大切だと思いました。自分の悪いところは、うるさいことです。よく友達に「うるさい」と言われます。その自分の悪いところに気づき未来につなげていくことが大切だと思いました。広島平和式典の「平和への誓い」で言っていたように普段の日常にもたくさんの平和があります。なので、自分の短所や、苦手なことを直すことでもいいと思います。それが、自分の悪いところに気付くきっかけになると思います。すぐに平和にならないと思います。平和にするためには、これに向かって一人一人が意識するのが大切です。

---

## 未来へ残す

糸魚川東中学校 2年1組 朝比奈 小春

私がこの研修に参加しようと思ったきっかけが、毎年8月6日に行われている、平和記念式典の様子をテレビで見て、興味を持ちました。この研修では、被爆者の方からお話を聞き、平和記念式典に参列するなど、貴重な体験をしてきました。

研修の中で一番心に残っていることが広島平和記念資料館で見た、被爆者の方々の生涯です。原爆が落ちたときの人の様子や環境、そして遺品を見て、あまりにも悲惨な出来事だと思いました。焼けた遺体や、変色した遺体、皮膚が垂れ下がり、やけどをした方など、悲しすぎる現実だと思います。もし、自分が大切な人、親しい人を一瞬にしてなくしてしまったらと思うと涙が止まりませんでした。

被爆をした方がたくさんいる中で特に考えさせられた人が、原爆の子の像のモデルとなった、佐々木禎子さんです。佐々木さんは2歳の時に被爆をし、白血病によって享年12歳で亡くなった方でした。生きたくても生きられない、そのような思いをした方がたくさんいるのだとわかりました。そして亡くなる最後まで、自分の病気と懸命に戦い続け、平和を願ったのだとわかりました。

研修全体を通して学んだことはたくさんありますが、特に、未来へ伝えていかなければいけないことがたくさんあること、人の命の重さを知ることができました。被爆によって亡くなった方の最後はどんな状況だったのか、肌が焼け、想像を絶するような痛みを感じた人がどれほど多くいたのかなど、時代が

---



過ぎ、伝える人がいなくなっていくほど、伝えなければいけないことがたくさんあると思いました。そして、人の命が原爆によって、戦争によって奪われていいものではないとわかりました。人の命の重さはみんな平等であるべきで、人が作った核兵器で人の命が奪われる未来は絶対にあってははいけません。改めてそのことを知ることができました。

わたしはこの研修がなければ、戦争や原爆について深く知ることはなかったと思います。毎年行われている広島平和記念式典をぼんやりとテレビを通して、見ているだけだったと思います。ですが、この研修を境に、原爆について、戦争について興味を持つことができました。「戦争はしてはいけない」ということだけを考えているのではなく、どんな被害がこれまであって、何人もの人が亡くなったのか、ということを知っていくからこそ、戦争について学ぶことができました。

この研修で学んだことは原爆被害の一部で、私がまだ知らないことがたくさんあると思います。自分のまだ知らない原爆の被害について、もっと知り、少しでも多くの人に広めて、未来に残していきたいです。

今の生活を、家族を、友達を、支えてくださっている方を大切にしていきたいです。

最後に、この広島派遣研修に連れて行ってくださった職員の皆さま、一緒に学んだ生徒の皆さん、本当にありがとうございました。

---

## 広島派遣を終えて

糸魚川東中学校 2年2組 内田 光

私は、8月に広島に行き、資料館の見学や式典に参加しました。実際に見聞きし、たくさんのことを学び考えることができました。

平和記念資料館では原爆投下当時のものや写真が残されており、言葉では言い表せない感情がわきました。大やけどを負った人などの写真や絵を見ましたが、どれも見るだけでも痛々しく、辛い気持ちになりました。

平和記念式典には、外国の方もたくさんいました。国を越え、もう二度と同じことを起こしてはいけないという共通の認識があることを嬉しく思いました。私は、広島県知事がおっしゃっていた「万が一、核抑止が破綻した場合、全人類の命、場合によっては地球上の全ての命に対し、責任を負えるのですか。世界で核戦争が起こったら、こんなことが起こるとは思わなかったと、肩をすくめるだけなのではないでしょうか。」という投げかけにドキリとしました。自分が使わなかったとしても他人事として考えてはいけないと改めて感じました。

研修で特に印象に残ったことが2つあります。

1つ目は、原子爆弾の大きさが小さかったことです。広島に落とされたものは、長さ3m、直径0.7m、重さ4tと、私が考えていたより大変小さいものでした。この爆弾1発が一瞬にして多くの人の命を奪い、街を破壊してしまうなんてと鳥肌が立ちました。

2つ目は、人間魚雷です。一回の攻撃と引き換えに1人の人が亡くなる。それはとても非人道的なことだと思いました。乗る人の気持ち、送り出す家族の気持ちを考えるととても辛いです。

私は広島に行き、戦争では誰もなにも得することはない、ただ人々から幸せを奪うだけだということを知りました。アメリカは、なぜ原子爆弾を使ったのか疑問に思い調べました。日本を早く降伏させ、アメリカ軍の犠牲を少なくし

---

たいと考えていたため、また、原子爆弾の保持を示すことで世界で優位に立ちたい、原子爆弾を使ったことで終戦し、多額の費用と多くの人材を使い開発した原爆が意味のあるものだったとアメリカ国内に知らしめるため、それらのために、原子爆弾を使ったとのことでした。自国を注目させるために原子爆弾を落とすのは、人々を苦しめてよい理由にはなりません。

私は、広島の前爆投下で起こったことに目を背けず、しっかり向き合い学ぶことができました。これで終わりではなく、たくさんの人に戦争の恐ろしさを伝え、少しでも世界の平和を目指すお手伝いができればと思います。

---

## 広島派遣研修を振り返って

糸魚川中学校 2年1組 伊藤 さゆり

私は、広島派遣研修に参加して、「戦争」という一言では言い表せないことをたくさん見て、聞いて、学んできました。その中で特に印象に残っていることを2つ挙げます。

1つ目は「戦艦大和の技術を平和産業にいかしたこと」です。

1941年12月に戦艦大和は完成しました。質の高い戦艦を作ろうと当時最先端の技術を駆使したそうです。戦艦大和の製造は最高軍事機密で、秘密裏に進められました。

実際に完成した戦艦大和は全長263メートル、測距儀や10キロメートル先の文字が読めた探照灯などを搭載した、まさに「最強の戦艦」でした。当時製造に携わった人々は本当に高い技術をもっていたんだ、と感動しました。

戦艦大和は沖縄に向かっている最中、アメリカ軍の攻撃を受けて沈没してしまいました。乗員3,332名のうち、戦死者3,056名と、約9割の人が戦艦大和と共に沈みました。この事実を知ったとき、とても胸が痛みました。終戦後、職を失う人が大勢いたそうです。

しかし、戦艦大和で培われた技術は終戦後に「平和産業」に転換され、呉市は物づくりのまちとして今まで発展してきました。戦争が終わったからといって戦時中の技術をなくすのではなく、別の何かに活かしていこうとする考え方は見習うべきところだと感じます。

私は大和ミュージアムを訪れてみて、「歴史を未来へ繋げていく」ということ

---

は、とても重要なことで、大事にしていかなければいけないと考えました。当時の人々が戦艦大和の技術を終戦後に「平和産業」に転換させて受け継いできたように、私たちも歴史を、過去の技術を「過去のもの」とするのではなく、人々の幸せを培う技術として、次に伝えていかなければいけないと思います。伝えていく方法をしっかり考えていこう、と思いました。

2つ目は「平和記念資料館」です。

平和記念資料館では、原爆が投下された直後の街並み、人々の様子、物の様子がそのままの形で展示されていました。大怪我を負いながらも子供の手を引いて必死に逃げようとする親子の絵や、黒こげになった衣類、ねじ曲がった梁の実物などは見ているだけで痛々しく、直視することができませんでした。また、原爆によって亡くなった人の最期の言葉も展示されていました。「明日もまた遊ぼう」と言って目を開かない子供、深呼吸をしてもう一度息を吸わなかった女性の様子は、戦争の壮絶さを物語っているような気がしました。

長さ3メートル、直径0.7メートルと小さな原子爆弾。そんな原爆の投下の影響は、その後生き残った人々の心と身体にも及びました。帰る家も帰りを待つ家族も無くしてしまったり、働く場所が無くなって子供に満足に食べさせられない苦痛を抱えながら自殺をしてしまったりと、泣きそうになってしまうことが78年前の広島で実際に起きていたのだと思うと切なくてたまりません。切なくなると同時に、戦争や原爆の恐ろしさを改めて感じ、恐怖で足が竦みました。

また、原爆投下にあたって、「パンプキン爆弾」と呼ばれる、原爆の形をした模擬爆弾を49発も日本に投下しました。日本各地に投下されたパンプキン爆弾は、1,600人以上の死傷者を出しました。

アメリカ軍が原爆を日本に投下した理由は「日本との戦争を終結させるため」でもあり、「ソ連にアメリカ軍の力を見せつけ、優位に立つこと」でもありまし

---

た。そのような理由で、一瞬で広島市民約 14 万人の命が奪われたのは、とても非道で許してはいけないと思います。

私が今回の広島派遣研修で一番心に残っているのは「原爆ドームが街中にぼつんと佇んでいること」です。周りには高層ビルが立ち並び、歩いている人やバス、電車などが行き交う、とても活気があり、賑わっている町の中にそこだけ少し浮いた様相で原爆ドームが建っているのを見て、なんだか原爆投下以前の広島の様子が垣間見えたような気がしました。原爆が投下されていなかったら、戦争が起きていなかったら、きっと原爆ドームは「広島物産陳列館」として賑わいのある場所になっていたのだらうと思うと心が苦しくなりました。

今回、改めて「戦争は二度と起こしてはいけない」、「原爆などの使用を許してはいけない」と強く思いました。日本は原爆の被害を受けた「被害者」です。しかし、様々な人を傷つけた歴史をもつ「加害者」でもあります。被害を受けたことだけを歴史として伝えるだけではなく、日本が害を与えた事実も共に伝えていかないと本当の意味で歴史を伝えたことにはならないと思います。

私が今回学んだことは、ほんの少しの事実だけで、まだまだわからないことだらけです。正しく知って正しく伝えることは、これからの私たちの役目だと思います。私は、もう一度日本が起こした「加害」と受けた「被害」について調べ、考える必要があると思いました。平和をこれからもずっと続けていくために、地球上のすべての生物にとって安心できる社会を作っていくために、まずは今回学んできたことを仲間に、家族に、みんなに伝えていこうと思います。

---

## 広島派遣研修を通して

糸魚川中学校 2年2組 長谷川 紗花

私は、8月5日から7日の広島派遣研修に行ってきました。広島派遣研修では核兵器のない世界にするために、各国首脳による話し合いをしていることが分かったり、胎内被曝者のお話を聞くことができたりして、初めての経験から大切なことを学ぶことができました。

今回の広島派遣研修で特に印象深かったことは、広島平和記念資料館で見た、生々しい被爆の風景と現在の核兵器の危険性です。広島記念資料館では、被爆者の遺品や目を覆いたくなるような被爆の惨状を示す写真などが展示されており、驚きました。核兵器の危険性では、核兵器をなくす呼びかけを始めた頃から、核保有国の数は減りつつありますが、核兵器を保有する国の数は増えていきました。私は、この現状に疑問を持ちました。なぜ、『核兵器をなくそう』と呼び掛けているのに、核兵器を保有する国が増えていくのだろうか。私は、この問題について、核兵器製造の技術が皮肉にも高まったからだと思いました。

広島平和記念資料館以外にも様々なことを勉強しました。研修を通して伝えたいことは平和の大切さです。2日目の平和記念式典で広島県知事がこう問いかけていました。

『万が一、核抑止が破綻した場合、全人類の命、場合によっては地球上全ての生命に対し責任を負えるのですか。』私は、この問いを聞き、全人類の命の責任を、

---

人間が一人きりで追うことはできないと思いました。

平和を壊すことは一瞬だけど、壊した世界平和を取り戻すためにかかる時間は想像以上に長いことを知りました。私にとっての平和は、家族や友達がいつも身近にいてくれることです。家族は、私のことを温かく見守ってくれるし、友達と一緒に遊んだり、勉強したりしてくれます。そんな平和を一瞬でなくしてしまう核兵器は、今もいろいろなところで威嚇に使われてしまっている現実にも、ものすごく恐怖を感じました。

私は、3日間の広島派遣研修で、今までもっていた中学生の立場としての視点だけでなく、被爆者からの視点、実際に戦争で戦っていた人たちからの視点で、原爆や広島資料館・戦艦について知ることができました。この経験から、感じたことや考えたことを多くの人へ伝えていきたいです。

最後に、78年前に広島に落とされた原爆の怖さを決して忘れることなく、二度と同じことを繰り返さないために、私たちのような現代に生きる人々に何ができるかをみんな考えていかなければならないことを広めていきたいです。

---



## 広島派遣研修で感じたこと

糸魚川中学校 2年3組 北山 結菜

私は8月5日から3日間、広島派遣研修に参加してきました。3日間を通して、戦争の怖さ、平和な現在の幸せについて学ぶことができました。

被爆体験者の講話では、山口さんからお話を聞いてきました。原爆を落とされたとき、山口さんのお兄さんが見た話では、家族みんなが傷だらけで、上も下も服が全部焦げてしまうほどの被害で、もう一人のお兄さんはすぐに亡くなってしまったそうです。亡くなった兄以外の家族は助かったものの、妊娠中の母親のお腹にいた山口さんは放射線の影響を受けており、生まれた後、たくさんの病気をわずらい、助からないかもしれないと言われたそうです。山口さんの命は助かりましたが、山口さんは心身ともに深い傷を負い、長い間その傷は消えることはありませんでした。原爆で家族を亡くした苦しみだけでなく、生き残った人も亡くなった人以上の辛い苦しみを抱えて生きてくるしかなかったということを学ぶことができました。

大和ミュージアムでは、「人は国のために死ぬ」という言葉が私の心に刺さり、忘れられなくなりました。当時、訓練をするときは、「何回生まれ変わっても国のために頑張る」、「何回生まれ変わっても敵を滅ぼす」という言葉を教え込まれたそうです。人間魚雷「回天」は、大量の爆薬が積まれた魚雷に兵士が乗り込み、水中から敵に突撃するもので、出撃したら生きては帰ることがで

---

きない兵器でした。兵士は死ぬ覚悟をした上で訓練をしたり、戦っていたのだと思うと、とても苦しい気持ちになりました。そして、自分の大切な人が亡くなっていくのに、何もできないその家族は、もしかしたら一番辛い思いをしたのではないかと私は思いました。

家に帰ると、私には優しくしてくれる家族がいます。学校に行くと、一緒に話してくれる友達があります。でも、それは普通のことではありません。大切な人と会えることはとても幸せなことです。そして、今の平和を作ってくれた辛い思いをした人々のことを忘れてはいけません。これからは今ある幸せを大切に、そして、戦争は人から当たり前生活を奪い、二度と繰り返してはいけないということをしっかり伝えて繋げていきたいです。

---

## 平和への第一歩

糸魚川中学校 2年4組 猪股 紗瑛

広島では多くの貴重な経験をさせていただきました。

平和記念式典では広島市長、広島県知事、総理大臣の言葉を聞きました。私が一番印象に残ったのは、こども代表の平和の誓いの言葉です。その中にこのような言葉がありました。

「なぜ、自分は生き残ったのか。」仲間を失った曾祖父は、そう言って自分を責めました。原子爆弾は、生き延びた人々にも心に深い傷を負わせ、生きていくことへの苦しみを与え続けたのです。

なぜその言葉が強く印象に残ったのかというと、次の二つのエピソードがあったからです。

一つ目は広島に着いた夜に聞いた山口さんのお話です。

原爆を落とされた瞬間も大変だったけれど、その少し経った後も、家が焼け、帰るところが無くなったり、放射線の影響で髪が抜けたり、病気にかかったりと、精神的にも肉体的にも辛かったと話をされていました。また、被爆者手帳を持っているために差別されることもあり、山口さんのお母さんやお姉さんは、被爆者手帳を受け取らなかったそうです。原爆を生き抜いても、苦しみがあつたことを

---

知りました。

二つ目は、平和記念資料館にあった伸ちゃんの三輪車という展示物です。この三輪車の持ち主である伸ちゃんは、その日も大好きな三輪車に乗って遊んでいたそうです。しかし、家の前で被爆し、その夜苦しみながら亡くなりました。お父さんは死んでからも遊べるようにと伸ちゃんにヘルメットをかぶせ、三輪車と一緒に庭に埋葬しました。40年後、伸ちゃんと一緒に掘り起こされた三輪車は被爆の恐ろしさを伝えるため、資料館に寄贈されました。伸ちゃんの叔父さんはその原爆の記憶について次のように話しています。「伝えたいけれども思い出したくない。でも伝えるためには思い出さないといけない。それをあえて思い出すということをしていた。」

広島の人々が生きていくことの苦しみを背負いながらも、原爆の悲惨さを現代まで伝え続けてくれていることを知りました。私は広島に行き、そこに生きているみなさんの話を聞いたり、実際に資料を見せていただいたりして、その苦しさをひしひしと感じました。そして今を生きている私にできることは何かを考えることができました。

平和を願う、平和を求めることは実はとても簡単で、中身のないものだと思います。なぜなら願う、求めるということは、他の人に平和を作ってもらおうということになるからです。そうではなく、自分たちで平和とは何かを考え、作っていかなくてははいけないと思いました。平和の誓いの言葉の中に、そのヒントがありました。

「みんなの笑顔のために自分の力を使うこと。」

---

まずは身近な人たちが笑顔になれるように、自分の力を使っていきたいと思います。

これが私の平和への第一歩です。

---

## すべての人々が安心して暮らせる世界を目指して

青海中学校 2年1組 小田嶋 陽菜

私は、8月5日から7日にかけて広島市で行われた広島派遣事業に参加してきました。

参加した動機は、過去に広島に投下された原爆について、ニュースやSNSで見ただけではなく、自分の目で確かめたい、見てみたいと思ったからです。

まず1日目に被爆者の方から体験講話をお聞きしました。講師の山口誠治さんから、ご家族の被爆体験や山口さん自身の放射線による病気、忘れてはいけないことなど、たくさんの貴重なお話しをお聞きしました。山口さんは母親の胎内で被曝しました。山口さんの二人の兄は爆心地から13kmの疎開先の畑で被爆しました。一人の兄は原爆投下後に降った「黒い雨」の影響で、足の肉が腐ってしまいました。もう一人の兄は放射線が原因で亡くなってしまいました。自分の周りの人が亡くなったり、苦しんだりしているのに、通り過ぎるだけで何一つ助けることができなかった当時の様子を聞き、山口さん本人も辛い思いをされたそうです。

私は山口さんから、「私たち日本人が一つ忘れてはいけないことがある」と教えていただきました。それは日本の加害の面です。自国の被害だけでなく、日本も相手国を傷つけたことを忘れてはいけないという、新しい視点を持つことが出来ました。「加害」という絶対に忘れてはならない面も一緒に伝えていく必要があると思いました。

---

次に、2日目に見学した大和ミュージアムです。大和ミュージアムでは呉市の歴史や戦艦「大和」についての情報などが展示されていました。大和ミュージアムで心に残ったのは、人間魚雷の特攻隊員、塚本太郎さんが最期に残したボイスメッセージです。塚本さんは、メッセージの最後に「こんにちは、元気に行きます」という言葉を残していました。私は、弱音を誰にも見せず、無理に強がっているように感じました。自分はこのことはしたくない。だけど、国に従わなければいけないという当時の現状を切実に感じました。

そして、私が今回の研修で一番心に残ったことは、3日目に見学した平和記念資料館です。そこには、火傷をした方の写真や、ボロボロになった服やお弁当箱などがたくさん展示されていました。ある一人の被爆者の方は、原爆が投下される前日に「お父さん、今日おいしいスープ作ってあげるね」という言葉を残していました。私はその言葉を聞いて、やりたかったこと、達成したかったこと、いろんな思いがあったのではないかと思いました。その思いを叶えるために、「生きたかっただろう」というふうに感じました。

また、原爆は人の願いや生きる希望を失わせ、「あたりまえの生活」や「あたりまえにある幸せ」を一瞬にして奪う本当に恐ろしいものなのだと感じました。私は、生きる希望や、あたりまえの生活を奪う核兵器を誰一人使うべきではないと、強く思います。

ある一人の被爆者の方は、「一生懸命すると何でも面白い」という言葉を残しています。私はその言葉のとおり、今、学習や委員会、部活など活動できることに感謝しながら一生懸命頑張ろうと思います。

私にできることは、今回の研修で学んだことを他の人に伝えることだと思います。戦争の悲惨さや辛さを周りに伝えることで、世界中のすべての人々が安心して暮らせる世界になってほしいです。

---

最後に、今回の研修でお世話になった糸魚川市役所のみなさん、先生方、生徒のみなさん本当にありがとうございました。



## 広島に行って学んだこと・考えたこと

青海中学校 2年1組 長谷川 未空

### 1. はじめに

これまで私は、日本の歴史について深く考えることはあまりなかった。また、世界で起きている戦争について「大変だな」とは思うものの、身近なこととして捉えることはなかった。そこで、今回の研修に参加することで、広島での戦争の歴史について調べ、学び、もっと本当のことが知りたい、実際の戦争の様子を見たいと思った。

### 2. 学んできたこと

#### (1) 原爆ドーム

平和記念公園にある原爆ドームは、戦争の被害を受けてもなお残る建物である。

私が原爆ドームで驚いたことは、自分が思っていたよりも原爆ドームが大きく、全体的に壊れていた

ことである。3日目の平和記念資料館で原爆ドームの元々の建物の模型を見て、今の原爆ドームと比較すると、原爆ドームがどれだけ強く大きな力で壊れたのかよく分かった。また、爆心地から数キロ離れているのにこれだけ壊れていることに、原子爆弾の破壊力を思い知らされた。

---

(2) 被爆体験講話

講話者の山口さんは、原爆投下の翌月9月25日に生まれた胎内被曝者である。

私は原爆について事前に調べていたが、さらに詳しい話を直接お聞きしたことで、原爆投下後の状況を知ることができ、やはり原爆は恐ろしいものだと思った。講話の中で山口さんのお姉さんが見た、たくさんの人たちが川に飛び込んでいった光景を想像しただけで怖くなった。また、被爆者よりも胎内被曝者の方が放射線の影響を受けやすいことが分かった。そして、改めて原子爆弾などの核兵器を使ってはいけないと強く感じた。

(3) 平和記念式典

平和記念式典は毎年8月6日に原爆死没者を慰霊し、世界の恒久平和を祈念するために行われている。

私が平和記念式典に参加して考えたことは、世界の平和について目を向けることである。今までは自分の身の回りのことばかりで、世界平和について興味をもつことは少なかった。これからは自分のことだけでなく、周りにも目を向けて物事を見たり、考えたりしていきたい。

(4) 大和ミュージアム

大和ミュージアムは呉の歴史と科学技術を紹介する博物館で、特に戦艦大和が有名である。大和ミュージアムに行って、呉市の歴史や戦艦大和について学ぶことができた。呉市の海軍工場で質のよい戦艦をつくることになったため、戦艦大和がつくられた。他にも人間魚雷「回天」という魚雷に人が乗って敵に攻撃するが、乗っている人は亡くなってしまうという残酷な兵器がつくられていたことも知った。大和ミュージアムには、戦争のことだけでなく私にはまだ知らないことがたくさんあった。それ

---

らを知り、未来に繋ぐ必要があると実感した。

#### (5) とうろう流し

とうろう流しは毎年8月6日の夜に、平和記念公園の横を流れる元安川で行われる戦没者の魂を弔う行事である。私は自分でとうろうを作るのは初めてだったので、どのような平和のメッセージを書こうか戸惑った。しかし、学んできたことを生かして書き終えることができた。

私たちがとうろうを流すために元安川へ行くと、すでにたくさんの方がとうろうを持って並んでいて、こんなにも世界平和について考えている人がいることを実感した。

### 3. 終わりに

私は広島派遣に参加し、改めて戦争の悲惨さを感じ、戦争は絶対にしてはいけないと思った。戦後80年近く経っているのに、まだ戦争の被害で苦しんでいる人たちがいて、その人たちの話を聞いたことで、ますます戦争は恐ろしく絶対にしてはいけないと強く感じた。

平和記念式典で子ども代表の2名が、「世界平和を築くために私たちにもできることがある」と言っていた。確かにそのとおりだと思う。一人一人の力は小さいかもしれないが、できることからやっていくことが大切だと思う。これからは自分の身近にある世界平和のために「できること」を探して実行していきたい。また、家族や周りの友達にも伝えていきたい。

---

## 糸魚川市平和都市宣言

糸魚川市は、新潟県の最西端に位置し、日本海や北アルプスの山々などの自然資源とヒスイ文化をはじめとした歴史や伝統文化を有しています。この豊かな自然と歴史の織り成す地に生活する私たちは、この郷土を大切に守り、市民のいきいきとした活動と交流がもたらす活力のある美しいまちを築き、戦争のない平和で豊かな暮らしがいつまでも続くよう願っています。

しかし、今なお世界各地では、戦争によってかけがえのない多くの命が失われています。

私たちは、唯一の核被爆国の国民として、被爆の恐ろしさ、苦しみを伝えていく役割を担っています。また、次代を担う子どもたちの未来のために、平和で豊かな暮らしを伝えていかなければなりません。

糸魚川市は、市民とともに平和と安全を求める誓いを新たにし、核兵器の廃絶と戦争のない真の恒久平和を願い、ここに平和都市を宣言します。

平成19年6月28日

糸魚川市